

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32674

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23510329

研究課題名(和文) 地域社会と民俗服飾 - 質的分析によるフォークロリズムに関する地域・分野横断的研究

研究課題名(英文) Community and Folkcrafts: Cross Cultural and Area Studies for Folklorism by use of Qualitative Data Analysis

研究代表者

糸林 誉史 (ITOBAYASHI, Yoshifumi)

文化学園大学・服装学部・教授

研究者番号：60301834

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：近代化のなかで消滅に瀕していたアジアの民俗服飾が、第二次世界大戦後の開発政策の導入期に再発見され復興してゆく過程を明らかにした。また創出の過程で、どのような人的な働きかけやメディアの関わりが駆使されたのか。伝統的様式への近代的な諸制度の配置のなかで、織物にどのような言説が付与され、錯綜し、剥離していったのかを明らかにした。さらに生成する背景、その資源として存在した文献・実物資料と、それらを再解釈して歴史を構成しようとする地方史の編纂活動の存在にも注目した。再発見の過程で生じた象徴を巡る産地間での競合を通じて、逆に織物の由来や歴史についての言説は、一貫した「歴史意識」と物語性を獲得していった。

研究成果の概要(英文)：We focused on efforts to revive Asian traditional textile industries that underwent a decline and have become obsolete amidst cultural modernization. In particular, we compared the revival initiatives for folk clothing industries in Japan, South Korea, and Malaysia, whose governments have shown strong support for reviving these industries. The strong leadership and financial support provided by the local government were instrumental in reviving this important traditional folk clothing industry.

In 1960, Yomitan Village, through its economic development plans, initiated efforts to revive the Yomitanzan hanaori. In the 1980s, as part of their initiatives in restoring cultural traditions, and the local governments introduced programs on continuing the production of Hansan mosi. Under the new economic policy implemented in the 1970s, the Malaysian Handicraft Development Corporation introduced the use of kain songket, which was traditionally used as ceremonial cloth.

研究分野：文化人類学 地域研究

キーワード：民俗服飾 地域社会 フォークロリズム 沖縄 韓国 マレーシア 伝統的工芸品 織物

1. 研究開始当初の背景

「類似品との技術技法的な区別は不可能であり、製品の表示方法を除くと、例えば読谷山花織なのか、首里織なのか判別できない状況にある。特に手花織の帯地については識別が困難な実情にある」。織物事業協同組合の設立以前、混沌とした状況にあった沖縄の読谷山花織は、行政の強い影響と支援の下で、10 数名の伝統工芸士を育みながら、1970 年代半ばに復興を遂げた。

我々のグループは、2008 年より共同研究を企画し、沖縄を中核として韓国、マレーシアにおいていったん消滅したものの、もしくは消滅に瀕した民俗服飾が、70 年代から 80 年代の開発政策のなかで、「韓山モシ世界化事業団」や「マレーシア工芸開発公社 (MHDC)」が主導して生産現場を組織化することで実現した「伝統的工芸品の復興」を、織物従事者や各生産組織への聞き書きや一次資料の発掘によって明らかにした。本研究は、「民俗の二次活用」に焦点をあてて体系化し、分野横断的な手法を導入することで、新展開を目指すものである。

民俗服飾研究の国内外の状況についてみると、特に日本および韓国においても研究数の多いのは、「家政学」分野のアプローチである。服飾史、服飾美学、工芸史などの研究者による沖縄や韓国等の染織に関する実態報告は数多い。なかでも 1968 年より日本家政学会の民俗服飾部会は、家政という営みとの関連で地域の民俗服飾の実態をその背景と共に考察する研究者が集い、1985 年の最盛期には 125 名の会員を数えた。だが 2008 年には大学教育における被服科目の凋落が凄まじく、会員数の激減により解散する。一方 1980 年代より「服飾学・芸術学」分野のアプローチがみられた。日本と韓国では「服飾学会」が設立されている。だがその主流は、美術・工芸・デザイン史分野の研究

者による生産技法、文様、シンボリズムに関する個別研究であった。

2. 研究の目的

本研究は、民俗服飾の近代化 / 復興の過程に纏わる「文化の多層性と流用」という問題を、(1) 生活史・地域組織、(2) 地方史・自治体史誌、(3) 開発政策・文化政策の 3 つの局面と、その相関から、質的分析ソフトウェアを活用して整理・分析し、文化人類学・民俗学・社会学の研究者の協業と分野横断的手法により、「フォークロリズム (民俗の二次活用)」とその「歴史をもつれあい」の分析視角から描出し、民俗服飾研究の新展開を提示することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 「3 つの地域社会と民俗服飾(表 1.)」を対象に、「3 つの局面(表 2.)」と、その連関を、「質的分析 (QDA) ソフトウェア (ATLAS.ti)」を活用しながら、概念・カテゴリーのネットワークから整理/分析することで、普通の人々の日常的な「もののやりかた」である「文化の多層性と流用」の問題を体系的に追求する。

(表 1.)

「読谷山花織」	「韓山モシ」	「ソンケツ」
絹・綿の浮織	苧麻の上布	絹・綿の紋織
読谷山花織事業協同組合	韓山モシ世界化事業団	マレーシア工芸開発公社

(表 2.)

生活史・地域	地方史	開発政策
1) 生活史調査	1) 地域史誌編纂	1) 開発計画
2) 生産組織調査	2) 地域行政	2) 文化商品化
3) コミュニティ	3) 地域博物館	3) 文化事業

(2) 分析視角

「フォークロリズム」とは、1970 年頃よりドイツ民俗学のヘルマン・パウジンガーにより提唱されてきた民俗文化が本来のコンテ

クストを離れて見出される「民俗の二次活用」を焦点とする議論である。同様の議論は、文化人類学における「文化の客体化」論があり、1980年代から植民地研究のニコラス・トーマスらが展開してきた。この二つの学問分野にまたがる議論の大きな意義は、伝統と近代の二分法を否定し、かつて「真正な伝統（民俗文化）」と呼んだものも、西洋とアジア、中核地と周辺、近代と伝統、近代知と生活知との「歴史のもつれあい historical entanglement」のプロセスのなかで、そのいずれにも還元、帰属させることのできない状況であると捉えたことにある。本研究が対象とする民俗服飾の近代化／復興の過程に纏わる「文化の多層性と流用」という問題に対して、いま-ここ の生活の場のなかで自己をとりまく関係性を肯定しながら、生き抜くための人々の「日常的な実践」を、分析枠組みとしての「歴史のもつれあい」を用いて、人とモノの関係性、思い込みや間違いも含めた「複数のリアリティ」として記述すること。また、近代システムに包摂された生活の場における日常的な実践、およびそれを支えている「コミュニティ」の可能性を、地域社会の具体的な歴史的過程に注目して探ることが、本研究の核心となる。

(3) 調査手法

質的分析ソフトウェアを口述データおよび一次資料などの資料整理と分析に積極的に導入する。3つの局面と3つの地域社会ごとにプロジェクトを設定して、日本語、ハンダ、マレー語・英語の多言語テキスト、語り、制作物、動画、一次資料を各種の引用文とともに入力して、分析単位のコード化/データ探索 概念・カテゴリー整理と群化 コード間の関係づけと理論構築を行うことで、地域と分野を横断的に記述・分析することが可能となる。

4. 研究成果

(1) 韓国

「韓山モシ（苧布）」は、韓民族の白衣を象徴するものであり、忠清南道舒川郡韓山面で生産され古代より中国や日本への輸出品の筆頭に数えられてきた。しかし、1960年代になると、化学繊維の普及によって、苧栽培は激減し、壊滅的な状況にあった。

1960年代からの政府の五カ年計画による経済発展への自省、1970年代からのセマウル運動による自助・共同の地域開発の進展がみられた。

それは、第1に、国家による重要無形文化財の指定（1967年第14号）によって、その技術保持者・芸能保持者の生活費を補助するとともに、彼らの発表講演費や制作支援費および伝授教育費などを支給して保護と技術伝承をはかった。第2に、地方政府の支援を受け、「韓山モシ館」を建立して後継者の養成に努めた。第3に、政府の文化政策のもと、「韓山モシ文化祭」（1989年から）の開催を通して観光化とブランド化（2011年ユネスコ無形文化遺産に登録）をはかった。第4に、自助努力として共同組合を結成し、生産者への還元率を向上させた。

(2) マレーシア

金銀糸で刺繍をした浮織である「カイン・ソンケツ（kain songket）」は、1920年頃まではマレー半島東岸のトレンガヌ州で織られる儀礼布で、一部は輸出されメッカの巡礼者に販売していた。だが1950年代には衰退し、品質や生産組織に問題を抱えていた。

1970年代になると政府は経済不均衡の是正を目指すプミプトラ政策の実現に向けて、マレー人社会向けの開発政策を実行する専門機関を設立した。1979年には「農村工業開発公社（RIDA）」が再編されて「プミプトラ殖産振興公社（MARA）」となり、染織を含む各地の伝統工芸を再編成するため、「マレーシア工芸開発公社（MHDC）」が設立された。

1980年代初頭、マレー人企業家育成のための特別機関が設立された。他方、各地の工芸センターでは、政府資金を得て、定期的な研修コースが設置され、80年代中頃にはこの研修生制度が軌道に乗り、修了後には貸付とともに、公社（MHDC）が製品を発注して自立した研修生の製品を買い取り、それを販売公社が国内外で販売するようになった。

1990年代からはマレー人起業家の育成事業に重点を移し、個人工房の育成やアメリカ製大型織機の導入、自動織機の研究開発などが公社（MHDC）を拠点に行われている。

（3）沖縄

沖縄において「花織」といっても「多くの種類があり、現在では類似の織物が県内の他産地でも織られており、なかなか複雑な状況」にある。沖縄県伝統工芸指導所の小橋川順市によると、読谷山花織と他の地域で織られる花織との「技術技法的な区別は不可能であり、製品の表示方法を除くと、例えば読谷山花織なのか、首里織なのか判別できない状況にある。特に手花織の帯地については識別が困難な実情」であり、「読谷山花織」とは「読谷村一円で生産されている伝統的な絞織物」とされていた。

1972年、沖縄の本土への復帰に伴って政府は沖縄開発庁を発足させ、十年間の沖縄振興開発計画を策定した。伝統工芸については産業としての振興が基本方針として取り上げられ、翌73年には「伝統工芸振興審議会」が発足した。また沖縄においても73年に沖縄県伝統工芸産業振興条例を制定、伝統工芸指導所を設置して技術面での指導を本格化させた。また沖縄県は1974年、商工労働部に「伝統工芸課」を新設し、76年に「沖縄県工業振興センター」を設立した。

一方、読谷村独自の展開が指摘できる。1974年に村長に就任した山内徳信村長の強力な働きかけのもとで村づくりがなされた。山内は、「人間性豊かな環境・文化村」を構

想し、「村民主体の原則、地域ぐるみの原則、風土調和の原則」の3つを基本理念として、1978年に10年間の「読谷村総合計画・基本構想」を実施した。そこでは村づくりの基本方向の一つとして「沖縄の伝統工芸を支えるむら」が挙げられ、「花織はヤチムン（焼物）」とともに、村で発展させるべき伝統工芸の一つ」と重要視された。そのために後継者養成と展示・販売も出来る施設として「伝統工芸総合センター」の建設や村内三ヶ所への工房の設置など、行政からの財政支援と村の強力なリーダーシップが大きな意義を持っていた。

（4）経済発展とフォークロリズム

近代以後にいったん廃れたものが、第二次世界大戦後の各国の開発政策の導入期に再発見された経緯を持つ。その後、この織物は、地域の保存会や技術講習会によって素材や図案の形態が整えられ、大都市圏への出荷と展示を通じて知名度を増していった。つまり、復興された織物は、伝統の創出、あるいはフォークロリズム的な側面を色濃く持っていたといえる。

またこのような創出の過程で、どのような人的、地域政策的な働きかけ、ならびにメディアの関わりが駆使されたのか。それらの近代的な諸制度の配置のなかで、この織物にどのような言説が付与され、錯綜し、さらに剥離していったのかを明らかにすることで、「民俗服飾」の近代を考える家政学でも芸術学でもない地域研究としての調査手法を開発し、学会報告等で評価を得た。

さらに、織物の復興が生成する背景、あるいはその資源として存在した文献資料および実物資料と、それらを再解釈して地域の「歴史」を構成しようとする郷土史家や地方史の編纂活動の存在にも注目した。伝統の再発見の過程で生じた「織物」という象徴を巡る産地間での競争を通じて、逆に「織物」の由来や歴史についての言説は、一貫した「歴

史意識」と物語性を獲得していったと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

林在圭

2016 韓国の食生活からみる日常と非日常の関係. 静岡文化芸術大学研究紀要, 査読有. 16: 9-16.

高田知和

2015 当事者にとっての年中行事経験. 東京国際大学論叢. 人間社会学部編, 査読無. 東京国際大学: 23-43.

林在圭

2014 韓服の特徴と韓国伝統織物の韓山モシの技術伝承. 静岡文化芸術大学研究紀要, 査読有. 14: 21-30.

糸林誉史

2014 互酬性と社会的交換理論. 文化学園大学紀要. 人文・社会科学研究, 査読有. 22: 35-48.

高田知和

2014 戦前戦中期農村青年の災害経験. 東京国際大学論叢. 人間社会学部編, 査読無. (19). 東京国際大学: 73-93.

糸林誉史, 高田知和, 林在圭

2013 「民俗服飾」の近代化: 沖縄・韓国・マレーシアの比較研究. 生活文化史, 査読有. (63). 日本生活文化史学会: 41-56.

高田知和

2012 同郷団体がつくった学生寮におけるスポーツ活動. スポーツ史研究, 査読有. (25). スポーツ史学会: 17-28.

林在圭

2012 韓国の祖先祭祀における儀礼食の特徴と共食: 忠清南道一両班村落の事例を中心に. 静岡文化芸術大学研究紀要, 査読有. 12号. 13-21.

高田知和

2012 「再生」の社会史のすすめ- 読谷山花織にことよせて- 『JINSHA Magazine』, 査読無. (13). 東京国際大学: 20-26.

高田知和

2011 歴史と地域社会-自治体史誌論・再々考. 応用社会学研究, 査読無. (21). 東京国際大学: 21-46.

〔学会発表〕(計1件)

林在圭

2014.5.10 「韓国伝統織物の韓山モシの技術伝承 忠清南道舒川郡の韓山モシを中心に」 第41回 日本生活学会研究発表大会, 青山学院大学.

〔図書〕(計2件)

高田知和 他

2015 「地域で地域の歴史を書く」野上元編 『歴史と向きあう社会学』ミネルヴァ書房, 第3章, 384.

林在圭 他

2015 「韓国における自由貿易協定と6次産業化の現状」熊倉功夫監修・米屋武文編 『農の6次産業化と地域振興』春風社, 214-223, 254.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

糸林 誉史 (ITOBAYASHI, Yoshi fumi)
文化学園大学・服装学部・教授
研究者番号: 60301834

(2) 研究分担者

高田 知和 (TAKADA, Tomokazu)
東京国際大学・人間社会学部・教授
研究者番号: 70236230

林 在圭 (LIM, Jaegyung)

静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授
研究者番号: 80318815